

包括的保育に結びつけたムーブメント教育の 実践分析に関する研究

研究代表者	小林 芳文	(和光大学教授)
共同研究者	飯村 敦子	(鎌倉女子大学教授)
	竹内 麗子	(清水台保育園園長)
	吉村 喜久子	(鹿苑第二保育園園長)

はじめに

人間の健康や発達の最も大事な土台作りの時期が乳幼児期である。それを支える保育園の役割は大きい。そこでの細やかな手厚い保育はどの子にも必要であるが、とりわけ障害を持った子どもへの保育は、療育機関、施設や障害児センターなど専門機関では十分出来ない子どもの環境に適応する大きな力を支えるものである。近年、障害児の支援には、訓練とは異なる遊び、とりわけ身体を使った運動的遊びが大事であることに、関係者が気づき始めそれに結びつけた支援法の開発が求められている。本研究は、楽しい運動遊びの要素を持った遊びに付加価値を与えている活動としてのムーブメント教育に目を向けて、その環境力としての遊具活用の分析、ムーブメント教育での保育内容の実践を通して発達教育としての意義を考え、それが包括的保育の展開にどのように結びつくか、子どもの発達を巡る保育の在り方を考察することを目的としたものである。

研究方法は、研究1として障害児に寄り添える動的遊びを促す保育環境としての遊具について、研究フィールド園における活用の実際を分析すること、研究2として研究フィールド園で実施している年齢別保育内容を整理・分析して包括的保育の生かし方を探ること、併せてムーブメント教育アセスメントに基づくプログラムの立案と実施に触れること、研究3として保育士の専門性を生かした療育支援、保護者（家族）参加型の子育て支援の在り方について過去30年に渡って取り組んできた「ムーブメント教室」の取り組みを分析しその意義を考えることである。本研究のフィールド園は、福井県内の民間保育園、そして障害児支援の保育ネットワークを組んでいる「たけのこムーブメント教室」である。

1. 障害のある子どもみんなが共に育める保育の捉え方

全ての子どもの教育や発達が保障されるためには、「からだ、あたま、こころ」の全体発達に結びつく保育、とりわけ遊びが大きな役割を持っている。どの子どもも楽しく一緒に共に育つこと（共生）の時代に入り、保育環境での生活を共有することが求められている。そこに包括的保育の理念が浮上している。このような保育に向け

て環境をどうすればよいか、それにはどのような保育を進めたら良いか、障害乳幼児の保育士の専門性をどうすれば生かせるかなどが課題である。

2006年12月「障害のある人たちの権利に関する条約」が国連総会で採択され、インクルージョンの理念が唱えられた。この考え方は我が国の特別支援教育分野にすぐに定着し、障害児の教育や支援に世の中の多くが目を向ける流れが生まれた。そして近年保育分野においても浸透しつつある理念である。障害児の保育を巡っては、従来から統合保育（インテグレーション）というシステムがとられている。この理念で言えば、建物、施設、設備、遊具の環境は、必ずしも子どもの個性に寄り添ったもので無い場合もあり、同じ建物の中で、障害児と他の子どもが別々な保育に入ったり、一部だけが一緒だったりとその隔たり保育の問題が指摘されていた。それに変わってインクルージョンの保育は、どの子どもも一緒に保育を受け、その環境や関わりも全ての子どもを分け隔てなく包み込む（include）状態での保育ということになる。これが障害児のニーズに寄り添ったシステムで包括的保育（インクルーシブ保育）と呼ばれる保育である。

この包括的保育にふさわしい支援法と言われている「ムーブメント教育」の保育実践は、環境としての遊具が子どもの発達や成長に基づいて進められ、身体全体を使った活動のため感覚運動が豊かに楽しくできることに特徴がある。遊びの要素を持っている活動であるが、ただ遊ばせてほったらかしの活動でなく、また一方的なやらせでもない子どものアセスメントを生かして進める教育であるため、子どもは生き生きとする活動ができ、みんなが参加できるのである。

2. 動的遊びを促す保育とその遊具活用の実際

包括的保育を進めるには、どの子どもも楽しく参加できる魅力ある環境が無ければならない。著者は、平成19年度から21年度にわたって日本保育協会が厚生労働省の委託研究「障害児保育の現状と課題、調査研究報告書（研究協力者小林芳文ら、全国2,220保育所対象）」に関わる機会を持った。これによると障害児を受け入れている保育所は、57.6%と約6割に達しており（1人以上4

人未満の保育所割合が最も多い)、その障害タイプの約半数の49.5%は自閉症と軽度の発達に遅れを持つ子どもであった。受け入れている対象園の53.9%は、特に障害児のための特別な遊具、設備・備品は無いと回答している。

「無い」としている保育園では独自の工夫をしているのだろうか。どのように障害児が楽しめる遊びの環境を整えているのか明らかでなかったが、ムーブメント教育での理論と方法による環境作りを考えれば、市販の遊具が無くても部屋にあるような身近な物を加工して子どもの楽しめる遊具などが作れ、それを使った沢山のムーブメントプログラムが展開でき、子どもの発達やニーズに添った支援ができる。身近にある物とは、例えば布類、紙類、紐類、風船、タオル、シーツ、ペットボトル類、ビニール等である。

研究対象フィールド園では、これらの物も使って子どもが自然に「触りたくなる」「動きたくなる」手作り遊具を沢山提供していた。これについての保育士たちの意見は、障害児保育には「子どもの弱いところ」に目を向けている限り、障害児の環境は作りにくい。ムーブメント教育のような「子どもの楽しい活動を膨らます」「子どもの発達を見極め、感覚、知覚、高次認知を支える」という視点があれば、そのための遊びツールは、どんどん作れ、そして使えるとする保育士のことは、環境作りの上で説得力がある。

ところで障害乳幼児の健康支援、発達支援に寄り添える保育を進めるには、WHO（世界保健機構）によるICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を取り込んだ「環境―人間相互作用」の考えを活用した場作りや保育が要求される。

子どもの発達や活動性は環境に大きく支配されること、特に障害児の発達支援にこの「環境力」が強調されたことになる。また、障害児にはこれまで障害を持つ本人に寄り添っているとは思えない「いわゆる訓練型の支援」の関わりが目立ち、「子どもが喜び勇んで参加する活動」の方法が少ないことを嘆いてきた。ここにムーブメント教育による活動があり、子どもの好きな遊具、用具、遊び場、音楽、設備などの環境を子どもの立場（発達）から活用することに目を向けること、それは保育士から療育支援力を発信することを、我々は言い続けて来た。ようやくこのメッセージに追い風の時代が来たように思う。

前述の日本保育協会の調査で、楽しい動的遊びに役立つトランポリンの遊具について保育園での有無を見たところ、それを持っている園は障害児を受け入れている全対象園でわずか6.0%にすぎなかった。障害児の受け入れが4人以上7人未満の多く措置している園では15.4%と平均より高かった。我々はこのような動的な遊びが出来るトランポリン遊具は、多動児、自閉症児、重度の運動障害児、肢体不自由児などに極めて効果的であることを今



写真1：乳児の動きを引き出す優しい環境カバーで覆われた傾斜（スロープ）マット



写真2：保育室に設置された小型トランポリンと傾斜（スロープ）マット

回の研究でも確認できた。楽しい身体の揺れ刺激、感覚運動、脳幹の活性化に役立つトランポリンのような揺れ遊具があれば、子どもの笑顔も増え、健康も作れ、行動や自己コントロールも出来る。この環境が包括的保育に必要なのである。

研究フィールド園（清水台保育園、鹿苑第二保育園、杉の木台保育園）では、全ての保育室（乳児から年長児室）に柔らかなキルティングのカバーで覆われた小型のトランポリンが傾斜（スロープ）マットと組み合わせで設置され、感覚運動のムーブメントに添った「動きたいという心を育む場（遊具環境）」の風景が子ども達に細やかな配慮で提供されていた（写真1・2）。その他、障害のある子もない子も一緒に楽しみ包括的保育に使っている以下のような身近な素材、遊具があった。

①障害乳幼児（未満児の例）に寄り添える遊具などの環境

未満児での概ねの発達課題は、感覚運動機能の助長、豊かな触感覚刺激、筋感覚刺激、自然な動きの助長などであるが、ムーブメント教育での発達課題を押さえてお

くことで、子どもの個性に即した包括的保育での遊具の活用が可能となること示された。

- ・パフ、筆、軍手、風船でのマッサージやタッピング
- ・お米、大豆（ペットボトルに組み合わせて）を使っての動かす面白さ、音の違い、手足、全身への感覚刺激、感触を味わう。
- ・つり遊具（部屋につるして）…触ったり、動かしたり、目で追ったりする。
- ・手作り遊具（紙、紐、紙筒など）…手や足を動かして遊ぶ（握る、つかむ、触る等）
- ・バルーン…乗せて揺する、座らせての揺れ運動
- ・トランポリン…寝かせての上下動、ロールマットを組み合わせての運動（一部介助）
- ・スロープマット…這い上る・下りる、転がる
- ・トンネル…ハイハイでの通り抜け
- ・タオルケット…身体の転がり、ハンモック用の揺れ
- ・パラシュート…ファンタジー、かぶったり潜ったりの動き、みんなで楽しむ喜び
- ・キャスターボード…腹ばいでの移動、箱との組み合わせでの揺れ運動

②軽度障害児幼児（3歳以上児）に寄り添える遊具環境

軽度障害児や3歳以上児は動くことが大好きな元気な力を持っている。そのためにも色々な遊具（動的活動ムーブメントの展開のために）が必要となる。研究フィールド園では、以下のような子どもの発達課題のもとにほぼ毎日ムーブメント教育での保育を進めているとのことであった。その課題とは、身体意識能力（身体像、身体図式、身体概念）の形成、時間意識・空間意識を育てる、視知覚・聴知覚を育てる、認知機能を育てる、社会性を育てる等である。

- ・ロープ…またぐ、跳び越える（色々な高さ）、上を歩く、持って動かす、引っ張る
- ・フープ…両足ケンケン、ころがし、くぐり抜け、沢山のフープに入って渡る
- ・形板…提示された形に乗る、同じ色（形）を集める、並べる
- ・ビーンズバック…投げっこ、身体に乗せて歩く、同じいろ（形）を拾う
- ・クッション…間隔を置いて上を歩く、踏まないように跨いで歩く、高く積んでいく
- ・ラダー…ラダーの棧に触れないで歩く、跨ぐ、横にしてくぐり抜ける
- ・新聞紙…身体部位を隠す、身体に乗せて移動する、ちぎって遊ぶ、色々な音を出す
- ・パラシュート…上に風船、ボールなどをのせてみんなで動かす、波・ドームを作る

3. ムーブメント教育を取り入れた保育内容の考え方

研究フィールド園では、保育内容を作るためにどの園

でも25年ほど前から、ムーブメント教育を進めるためのアセスメントを使っている。このアセスメントは「からだ、あたま、こころ」という人間の行動全体と0歳から6歳という発達の流れを日常のムーブメント活動と抱き合わせて評定（チェック）することができるものである。とりわけ障害児の教育現場（特別支援学校など）では、IEP（個別教育計画）作成のために良く使われており、子どもはどのような活動が出来るのか、如何に発達を視座にした楽しい活動ができるプログラムを作ったら良いかを調べるツールになっている。これは単なる検査でなく支援に向けての手がかりを得ることを目的にしているため、全てのアセスメント項目と連携しているプログラムが提供されている。フィールド園で実践している年齢別ムーブメントの保育内容を通して、発達教育としての意義を検討した。

（1）MEPA-Rを使った子どもの実態把握、その支援

子どもの発達支援でムーブメント教育を進めるために、MEPA-R（Movement Education and Therapy Program Assessment -Revised；MEPA-R；ムーブメント教育プログラムアセスメント-改訂版）を活用した。このMEPA-Rは、子どもの全面的な発達を捉えるためのアセスメントであり、運動スキルや身体意識、心理的諸機能、情緒・社会性機能の発達を把握することができる。さらに、発達支援ステップガイド（小林、2005）と連携することで、支援プログラムの具体的な方法を得ることができる。

研究フィールド園は、MEPA-Rを活用して子どもの実態把握を行っている。図1は、平成20年9月生まれ女兒の入園時（平成21年7月）と一年後のアセスメント結果を示した発達プロフィールである。また、図2は、平成17年9月生まれの男児の3歳9ヶ月時と4歳1ヶ月時のアセスメント結果を示した発達プロフィールである。研究フィールド園では全園児を対象にMEPA-Rを実施し、その結果を保育内容（プログラム作成）の根拠として、年齢別のムーブメント教育プログラムを作成している。

①乳児期のプログラムのポイント

人間の一生の中で最初の一年間は、比較的穏やかな時期に見えるが、実は最も成長発達の著しい時期であり、人間の諸機能の土台作りの時期である。この時期は、前庭感覚への働きかけを中心に、動く力、見る力、聞く力など多様な感覚と運動を結びつけるムーブメントを展開する（プログラム例1）。

②3歳児期までのプログラムのポイント

この時期は、人間の特徴である二足歩行や言葉を獲得することにより、生活・行動空間が広がり、歩行の確立にとどまらず、走ったり、階段の上り下りや低い台から飛び降りたりするなど、からだ全体を使った粗大運動が

可能になる。手の運動(微細運動)は、粗大運動の発達に引き継いで3歳近くなるにつれて、未熟ながら指先のつまみ操作もできるようになる。この時期は、からだ全体を使った運動をできるだけ経験し、これにより、心身の正常な発達に不可欠な土台を獲得するムーブメントを展開する(プログラム例2)。

③6歳児期までのプログラムのポイント

この時期には、これまでの粗大運動中心の動きを一步抜けだし、手先や足先の運動やバランスなど、細かな筋肉や神経に関わる機能を発揮することができるようになる。手の操作や足指の機能も飛躍的に発達し、加えて知的な発達も目覚ましいことから、これらを促進するための課題を取り入れる。中でも、様々な感覚を同時に使う連合能力は上手に生きていくために必要な能力である。そこで、視覚—運動、聴覚—運動のように連合過程を発達させるムーブメントを展開する(プログラム例3)。

(2) 障害幼児が輝く包括的保育の実際を通して

研究フィールド園では、現在、発達障害児を中心に障害認定のある子ども5人が保育を受けていた。この中の杉の木台保育園で、我々は2人の障害児を含めて5歳児クラスの子ども達とムーブメント教育での保育をした。どの子どももムーブメント教育に積極的に入り、最後まで笑顔が見られムーブメント教育での活動の楽しさが確認できた。同時に障害を持っていることが全く解らないくらいムーブメントは包括支援には活用できることが解った。

研究フィールド園(3園)にいる5人は、全員が親子共に参加できる「たけのこムーブメント教育教室」のメンバーであった。この教室は29年間続いている障害乳幼児が保護者共に一緒に楽しめるムーブメント教育を使って発達を支援する教室である。この教室は研究フィールド園地区の保育園ネットワークで支えている保育園を延長した環境である(現在の協力保育園は17園である)。

子ども達は、自分の保育園とは異なった地域センターで、月一回(約3時間)開催されるムーブメント教室に集まって来る。他の保育園から参加する大勢の子どもと一緒に遊べるムーブメント教育での活動は、訓練優先のような古い形式にとらわれている(根付いている)障害児保育・療育に新しい風を吹かす力を持っていることを保育者の面談やアンケートで確認された。このような活動で子ども達を虜にできるのはなぜであろうか。その理由はまず普段の保育と連携しているムーブメントプログラムが親しみ易いこと、障害児の発達や保育について専門に勉強している保育士(認定ムーブメント教育指導者という)達が大勢いること、子どもの発達アセスメントの情報を活かして個々人の大好きなムーブメントを満足するまでできること、そしてなによりも養育者も気楽に楽しめるプログラムであり、家庭にまで遊具などのアイ

デアを持ち帰り、子どもとの遊びを家族で共有できる点にあることが解った。

ところで、障害児を取り巻く現状とその養育者の支援ニーズ調査を実施した村田らの研究(2010)によれば、養育者の中では、乳幼児の早い時期の1歳代に障害の疑いを持つ子どもの支援があれば良かったと回答したものが約40%を占め、「1歳頃にそのための子育て教室が欲しかった」「発達を促す遊びについて具体的な指導が欲しかった」などの意見があること、また、養育者の行政当局への希望で最も多かったことは「障害児支援の日常における充実」であったことを考えれば、研究フィールド園がネットワークを組んでいる方式によるムーブメント教室の在り方は包括的支援に大きなヒントになると思われる。

今回の研究を機会に、フィールド園では、包括的保育に活かすムーブメント教育の研修を専門の講師を招聘して実技研修、保育実施研修を行った。このような形での保育は、保育士の保育技術と子どもの発達理解と推進の研鑽に大変有意義であることも確認できた。保育士の学びが保護者の保育理解に反映し、障害を持った子どもを気軽に受け入れて保育ができ、たけのこ教室のような場所への参加も生まれ長く継続していることも解った。

本研究で、包括的保育の実際を杉の木台保育園の5歳児クラスを対象に(障害児2人、健常児25人)ムーブメント教育を取り入れた保育を行った。次のような保育士の感想や意見があった。

- ・2人の障害児は、いつもの保育場面以上に輝いていた。ムーブメント教育のすばらしさを実感できた。
- ・他の子どもたちが、約一時間近く集中している姿をみて、子どもに面白いことをすることは大事であることが解った。
- ・子どもを引きつけるテクニックは、遊具の使い方にもあることに気がついた。
- ・ロープを渡っていく場面で、数を数えたり、ことばをうまく使って行くことで認知の学習ができること、なるほどと思った。
- ・子ども達のパフォーマンスで、先生が良く拍手をしていました。子どもは笑顔を出しました。「保育はこれだ」と思った。
- ・成功で活動を終わらせることの大切さが解った。
- ・楽しいムーブメントをすることで、保育士自身もハッピーになれた。
- ・誰にでも出来るムーブメント活動は、優しい目線で子どもの環境が作れることを実感した。

4. フィールド園で取り組んでいるムーブメント教育による育児講座の実践

本研究では、フィールド園で取り組んでいるムーブメント教育による育児講座の実践を分析した。具体的には、0～1歳児と2～3歳児のそれぞれのグループにおける

実践とそこに参加する母親の感想等により、その意義を検討した。

フィールド園では、15年程前から保育士の専門性を生かす保育の立場から、若い母親の子育て支援に取り組み、地域での子育て支援を定期的に実施している。その目的は、保育園に入園を希望する若い保護者に保育を理解してもらうことや親子・家族参加型の教室を展開することで、育児の喜び、楽しさを実感してもらうことである。保育所での保育の内容を伝えることは、育児に経験の浅い母親へは大きなこころの支えにもなり、育児のすばらしさ、子どもと関わることのヒントを与える。このような子育ての楽しさを発信できるところが保育所であり、保護者参加型の育児支援を楽しく進めることが、子どもを育てる喜びとして膨らませ家族力を高めることにつながる。

（1）育児講座でのムーブメントプログラムの実際

育児講座では、家庭でも子育てに使えるものを提供することを重視し、育児のヒントにつながる活動を中心にプログラムを構成した。資料1・資料2は、育児講座のプログラムを保護者にわかりやすく伝えるために作成された記録である。この用紙には、今日の遊び、環境設定、親子の様子、評価反省、その他として相談などについて記入できるようになっている。ここでの育児講座が単なる遊び教室でなく、子どもの発達や健康をねらいにした子育てのヒントになることを明確にする上でも、このような整理を行うことが大切である。

資料1は、7月の育児講座プログラムとその記録である。ムーブメントの環境は、巧技台、ウオータークッション、小麦粉粘土、ビニール袋でのカーテンなどであった。そのねらいは、動きの基本、目と手、足の協応性、身体意識の向上である。親子の様子、相談などの記録も含めて、この記録が次のプログラムに参考となる情報や進め方に結びつくのである。

資料2は、9月の育児講座プログラムと記録である。ムーブメントの環境は、トランポリン、巧技台、ミニトンネル、感触遊びであった。そのねらいは、身体意識の向上、動きの基本、触覚刺激などである。親子の様子は、記録欄にあるようにお母さんも子どもと一緒に楽しんでいる様子や子どもが元気よく遊んでいる様子が示されている。

さらに、育児講座で実施したいくつかのムーブメントプログラムは以下の通りである。

①「揺れ」のムーブメント

…母親の身体を遊具にするプログラム。座った状態で母親の膝に子どもを乗せる。子どもの体とお母さんの体のぬくもりで暖かい雰囲気がみられる。そこで歌を歌いながら軽く膝を動かしたり、左右に揺れたりする。

…「たかい、たかい」や「横揺れ」のプログラム。か

らを上手に揺さぶることで、豊かな前提感覚刺激が与えられ健康の力が増す事になる。

…トランポリンでの揺れのプログラム。母子が一緒にトランポリンに乗って、ゆっくりふわふわの布団やキャンパスの静かな揺れを上手に使う。子どもが大好きな、ゆっくり上下動するトランポリンの動きが大好きである。

…ハンモックのような揺れのプログラム。家庭のもの、たとえば大きな布、シーツなどを活用した手作りのムーブメント遊具を活用する。心地よい肌触りと楽しい身体のバランス感覚を経験できる。

…カラーボールとボードを組み合わせたローリング遊具での揺れ。ボールの上をころころ転がる横揺れは、子どもも親も楽しいものである。親の膝に乗せてもらって一緒に身体の揺れを体験することができる。

②季節を感じるムーブメント

…秋のシーズンにふさわしい落ち葉を使ったムーブメントプログラム。落ち葉を触ってその感触を味わい、木の葉のにおい、こころが癒され、美しい自然の葉の色に引き込まれ、何度も何度も触って動かす。多様な感覚に働きかけることができる。

…水遊びのムーブメント。水の中には色の付いた水、小さなカラーボールなどの遊具が入っている。それをどのように使ってもよい。子どもの自由な活動を見ながら母親は、生き生きとする子どもの遊ばせ方は、如何にあるかを学んでいく。

（2）育児講座に参加した母親の感想

以下は、育児講座に参加した母親の感想である。

- ・家ではできない遊びや季節の歌にふれられて、とても楽しんでいる。同年代の友だちとも遊べるのでうれしい。（いつもは大人ばかりの生活が多い）
- ・毎回いろいろな遊びや歌を教えてもらえるのですごく楽しかった。
- ・参加した当初は1歳になって間もなく、ママに手をひかれて参加しているという感じだったが、自分でしたいことの所へ行ったり、自分でジュースやパンをもらいに行ったりと子どもの成長がわかってよかった。
- ・たくさんのお友達と一緒に活動するという機会が得られてよかった。いろいろな遊びがある中で、小さいながらも好きな遊びに熱中したり、他のお友達と一緒に、又は、順番に遊ぶことができて楽しかった。季節を取り入れた遊びや工作もよかった。
- ・子育ての面で不安なことなど、先生方に相談できる場所としても利用できてよかった。
- ・とても楽しかった。はじめは、ママから離れていかなかった子どもも今ではママから離れて一人で走りまわって遊べるようになった。
- ・楽しかった。妊娠中、出産後など、家ではあまり十分

に遊んであげられなかったりしたので助かった。家庭では、あまりできないこと（工作、スライム遊び、トランポリンなど）ができる場なので非常にありがたい。

- ・トランポリン遊びなど家では出来ない遊びに触れることが出来て、本人も楽しそうにしていたので、良かったと思う。毎回、季節に添った遊び（ムーブメント）があり、家での遊びのお手本にさせてもらった。
- ・いつも楽しく参加させてもらっている。毎回、いろんな遊びが道具を用意してもらって、家ではできない遊びができて、子どもも夢中になっている。私は県外から嫁いできたので、お母さんたちとも交流できて、話したりすることで、私の息ぬきの場にもなる。いつもいろいろな遊びを考えてくださる先生方に感謝している。
- ・家ではしない遊びがたくさんあり、先生方もいろいろアドバイスしてくれて良かった。
- ・とても楽しく、母として、勉強することもたくさんあった。
- ・他県から越して来たので、子どもだけでなく、自分も色々な人と知り合うことができ、とても楽しく参加できた。
- ・日中、一対一でいるのに、なかなかゆっくり相手をしてあげる事ができず、一人で遊んでいる事が多い毎日だが、参加させてもらっている間は、いつもより、ゆっくりと相手をしてあげられたので、いい時間が過ぎてよかった。家ではなかなかできない遊びが色々あって楽しめた。

多くの母親の感想に「楽しい」というキーワードが含まれ、また、子どもの行動の変化を具体的に捉えて、我が子の発達を実感することで育児の喜び、楽しさを感じていることがわかる。また、母親にとって、家庭ではできない遊びが体験できること、自分の知らなかった遊びの方法を提示してもらえることが日々の育児につながることも記されている。これにより、保育所に求められる「保育の専門性を生かした子育て支援」のあり方が示されたと考える。

おわりに

障害を有する子どもが大勢の子どもと交わる中で（またその逆も）、全ての発達の力が限りなく広がっていく。包括的保育はこれからの保育の新しい流れを作るために、関係者全員で取り組んでいかなければならない障害児支援の保育である。今回、我々はその一つの方法として楽しく動きながら発達や幸福を支えるムーブメント教育の役割について考察した。この支援教育の特徴は、遊具など環境を上手に使いながら、感覚機能や動きを刺激し、心理的諸機能を子どもの目線で育むことにある。訓練でない遊びの要素を持った動きは、子どもの自発性を

引き出し、楽しいという情緒を駆り立て笑顔を生み幸福感を満たすことにつながる。研究フィールド園では、現在もこれまでも多くの障害児（自閉症、ダウン症、脳性まひなど肢体不自由児、視覚障害児など）を受け入れてきた。本研究を通してムーブメント教育に基づいて保育をすることの意義と価値が考察できた。どの子どもでも参加できる包括的保育学の構築に向けてさらに研究を進めたい。

参考文献

- 日本保育協会；障害児保育の現状と課題、調査研究報告書、平成19年3月
 村田恵美他；発達障害児の養育者が求める支援～堺市質問調査より～、小児保健研究、2010、69(3)、402-414
 小林芳文；MEPA-R、ムーブメント教育・療法プログラムアセスメント、日本文化科学社、2005
 小林芳文；ムーブメント教育・療法による発達支援ステップガイド MEPA-R実践プログラム、日本文化科学社、2006

図1：MEPA-Rによるアセスメント結果（プロフィール表）

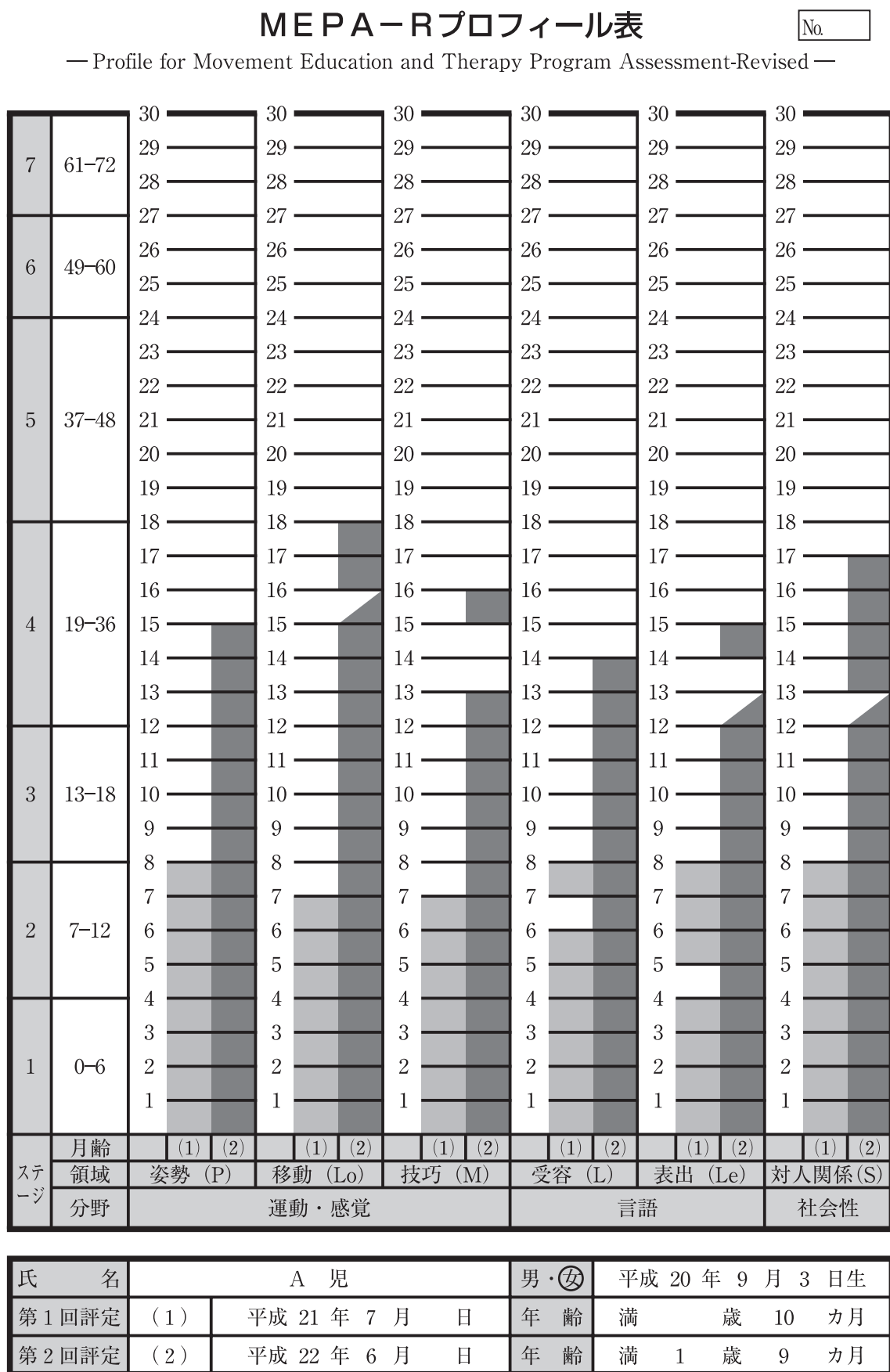
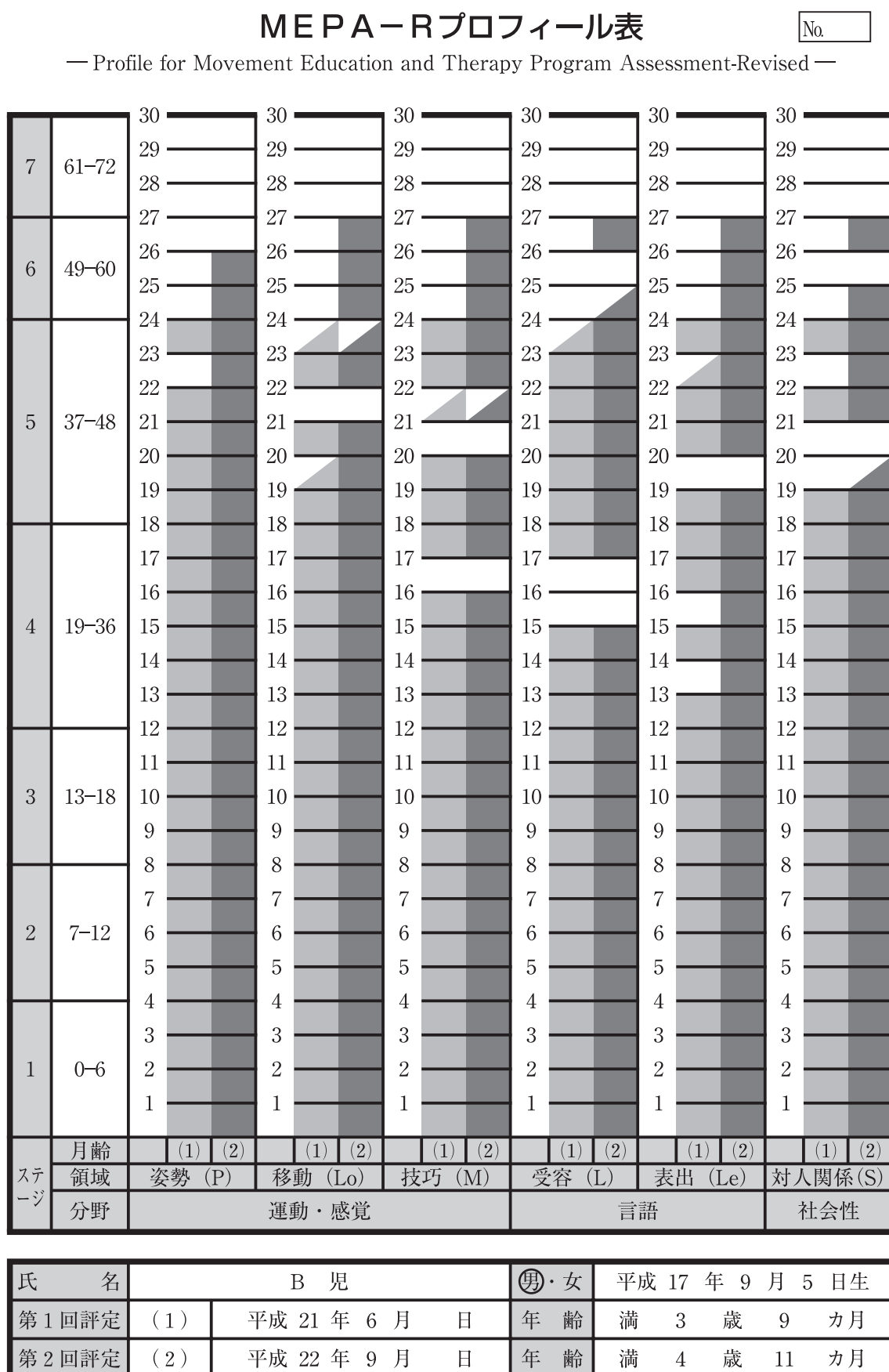


図2：MEPA-Rによるアセスメント結果（プロフィール表）



プログラム例1；

年 齢	0 歳児	達成課題	感覚運動機能を育てる ◎豊かな触感覚・筋感覚の刺激 ◎移動のための動きづくり ◎基礎的な身体意識を養う		
遊具及び教材			ムーブメントプログラムの活動例		支援のポイント
* スクーターボード			・ 前後、左右にゆらす ・ 前後、左右、上下にゆらす		・ 前庭感覚を刺激する ・ バランス感覚を養う
* ユランコ			・ 上向きで寝たり、座ったりしてゆらす、また回転する ・ 腹ばいにし、左右・前後・ジグザグに動かす ・ 浮き輪と併用し座らせて左右・前後・ジグザグに動かす ・ 身体のころがりを経験		・ バランス感覚を養う ・ 筋力を高める ・ 身体意識を高める
* トランポリン			・ 横抱き、縦抱き、あぐら座で抱っこして上下にゆらす ・ 寝かせて上下にゆらす ・ 浮き輪やロールマットを併用して		・ 筋力を高める ・ 身体意識を養う ・ 身体意識を高める ↓
* バルーン			・ 上下にゆする ・ 座らせてゆする		・ 筋力を高める
* パラシュート			・ パラシュートの上や下に寝て波立たせる（風の感触） ・ かぶったり、からだに巻き付け感触を味わう		・ 触感覚を刺激する ・ 身体意識を養う ・ ファンタジックな雰囲気 を味わう
* ロールマット			・ 腹ばいにし、胸の下にロールマットを入れる ・ 大きなロールマットに、腹ばいに寝かせ前後にゆする ・ 腹の下に入れ、四つ這い姿勢にする		・ 筋力を高める ・ バランス感覚を養う ・ 動きの基本能力を養う
* スロープマット			・ ころがる ・ ハイハイでの上り下り、よじ登り		・ 前庭感覚を刺激する ・ 動きの基本能力を養う
* トンネル			・ ハイハイで通り抜ける		・ 動きの基本能力を養う
* 身近な素材を使って			・ パフ、筆、羽根、軍手、水風船等でのマッサージやタッピング ・ お米、大豆を使って音の違いを楽しんだり、手や足、全身で感触を味わう		・ 触覚を刺激する ・ 身体意識を養う ・ 聴覚を刺激する
* 吊り玩具 * 手作り遊具			・ 触ったり、放したり、目で追ったりする ・ 手や指を動かして遊ぶ（握る、つかむ、穴に入れる等）		・ 視覚を育てる ・ 手の操作性を養う
配 慮 点	◎全身の皮膚からの刺激を通して、身体全体の感覚と豊かな情緒を育てる ◎色々な動きを楽しく経験しながら感覚運動機能を育てる				

プログラム例2；

年 齢	2 歳児	達成課題	身体意識を育てる ◎動きの基本能力を養う ◎視知覚能力を養う ◎操作性を養う		
遊具及び教材			ムーブメントプログラムの活動例		支援のポイント
* トランポリン			・ 一室のリズムでジャンプ ・ 2、3人で手をつなぎ、リズムにあわせて跳ぶ		・ リズム感を育てる ・ バランス感覚を育てる ・ 社会性を育てる
* パラシュート			・ 手で持って振る ・ 上に乗ったり下に入ったりする ・ パラシュートで作った空間をくぐる		・ 手の操作性を高める ・ 身体意識を育てる ・ 空間意識を育てる ・ 他者意識を育てる
* トンネル			・ 色々な高さのトンネルをくぐり抜ける		・ 空間意識を育てる ・ 目と手の協応性を育てる
* フープ			・ フープでつくった道を歩く ・ またぐ、跳ぶ、くぐる ・ 汽車ごっこ		・ 目と手の協応性を育てる ・ 空間意識を育てる ・ 他者意識を育てる
* ビーンズバッグ * ボール			・ 投げたり受けたりする ・ 転がしたり受け取ったりする ・ 玉入れ ・ ボーリング遊び（空き缶やペットボトルを使って）		・ 手の操作性を高める ・ 空間意識を育てる ・ 他者意識を育てる ・ 視知覚能力を養う
* 形板			・ 身体部位を乗せる（頭・手・足など） ・ 形板の上をゆっくり歩く ・ 色、形のマッチング		・ 身体意識を育てる ・ バランス感覚を育てる ・ 視知覚能力を育てる
* ロープ			・ ロープの上を色々な歩き方をする ・ ロープで川をつくりその上を跳ぶ		・ 移動の基本能力を育てる ・ 跳躍力を育てる ・ 目と足の協応性を育てる ・ 空間意識を育てる
* ラダー			・ 傾斜のラダーを登る ・ ラダーの間を歩いたりくぐったりする		・ 目と手、目と足の協応性を育てる ・ バランス感覚を養う
* スナップ、ボタンはめ、マジックテープやあけ移し（水・米・豆等）			・ 日常生活に必要なあらゆる経験を遊びの中に取り入れる ・ 手先、指先を使い、また、容器やスプーン等の用具を操作して物を移したり、入れたりする		・ 目と手の協応性を育てる ・ 集中力を養う ・ 手の操作性を高める
配慮点	◎基本的な動き（歩く・走る・跳ぶ・投げる等）を中心に行い、身体意識（自分の身体の意識）を育てていく ◎一人一人の発達を把握し、それにあった身体活動を提供するようにする				

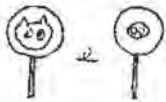
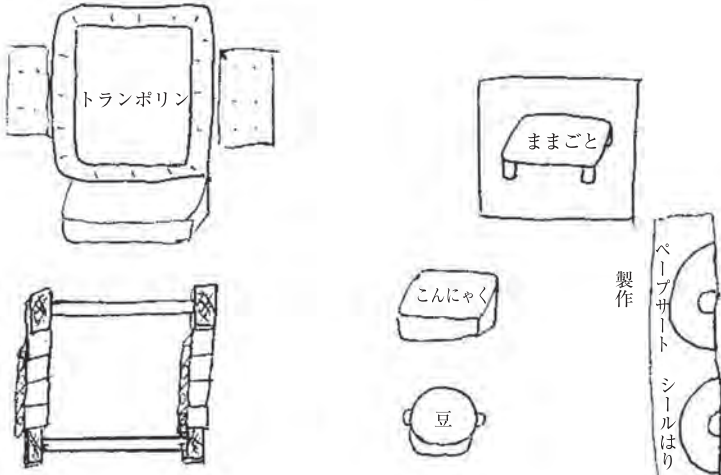
プログラム例3；

年 齢	4 歳児	達成課題	時間・空間・因果関係 ◎時間意識を育てる ◎空間意識を育てる ◎視知覚能力を育てる	
遊具及び教材			ムーブメントプログラムの活動例	支援のポイント
＊ロープ			・直線のロープの上を前・後・横歩きで渡る ・ジグザグのロープの上を歩く ・何色かのカラーロープを交差させ、指示された色のロープの上を歩いていく ・ロープで蜘蛛の巣を作り、またいだり、くぐったりする	・目と足の協応性を育てる ・身体意識を高める ・空間意識を育てる
＊フープ			・くぐり抜け ・ケンケンとび、ケンパーとび ・指示された色の中に入る（一色、二色）	・空間意識を育てる ・バランス感覚を養う
＊形板			・指示された色・形の形板にすばやくのる ・仲間集め ・三角2つで四角を作る ・数字の順序並べ	・敏捷性を養う ・視知覚 ・図形構成
＊ビーンズバッグ			・並べたビーンズバッグを飛び越える（前・後に跳んだり、色や数をいいながら跳んだりする） ・沢山並んでいるフープの中に決められた位置からビーンズバッグを投げ入れる	・時間・空間意識を養う ・目と手の協応、手の操作性を養う
＊新聞紙			・身体部位を隠す ・身体部位に乗せて運ぶ ・ちぎって遊ぶ ・色々な音を出して楽しむ ・新聞紙を切り抜き、出来た空間をくぐる ・新聞紙で道をつくり渡る	・身体意識を育てる ・バランス感覚を養う ・創造性を養う ・空間意識を育てる ・目と足の協応性を育てる
＊パラシュート			・3色の色を使用しているパラシュートを使い、合図で持っていた色から異なった色へ移る ・パラシュートの上に風船やボールをのせ、それらを落とさないように操作する	・視知覚適合能力を育てる ・手の操作性を育てる ・社会性を育てる
配 慮 点	◎空間意識能力を高めることにより、視知覚能力を促進する ◎集団でのプログラムを通して、協調性・社会性を育てる ◎形・色・大きさの弁別能力を高め、文字や数の基礎となる能力を育てていくようにする			

資料1：育児講座のプログラムと実施記録①

すくすくキッズ記録用紙						清水台子育て支援センター				
月 日	7 月 13 日 (火)				参 加	18 組	担 当	中野 小林 山下	記 録	山下
今日 の あ そ び	今日のムーブメント				製 作		お集まり			
	・ 巧技台 (戸板、ラダー) ・ ウォータークッション ・ 小麦粉ねんどで遊ぶ ・ ビニール袋のカーテン (かさ袋)・くぐる・たたくetc ・ おもちゃコーナー ・ お絵描きコーナー		・ 動きの基本を育てる ・ 目と手と足の協応動作を育てる ・ 感覚を育てる ・ 触感覚を育てる ・ 身体意識を育てる				うた「水てっぽう」 「ぞうさん」 「アイアイ」 ふれあいあそび コチョコチョマン おたのしみ すいかのいない いない パー			
環 境 設 定	お絵描きコーナー 赤ちゃんのおもちゃ ビニール袋のカーテン ビニール袋のビーズ 手先を使ったあそび 小麦粉粘土 ウォータークッション									
親 子 の よ う す	・ お母さん方同士での関わりも持てるようで、子どもを抱っこしあったりする姿も見られる。 ・ 小麦粉粘土のところでは、親子で、おままごとのようにしたりして上手に遊んでいる姿も見られた。 ・ お絵描きコーナーでは、子どものリクエストする絵をお母さんが描いたり、子どもの描いている様子をお母さん方が嬉しそうに見ている姿が見られた。				相 談 等 の 記 録	「他の子は、じっと座ってられるのにうちの子だけ…」と言っていたお母さんがいらっしやだったので、「お母さんの思いどおりにしようとするから逃げようとするのだと思うので、しばらく手を出さずに見守ってみてはどうですか？」とお答えしたところ、そのようにして下さりそのお母さんのお子さんも、少し離れたところに座って、リズムをとりながらうたを集中して聞いている姿を見せてくれた。				
評 価 ・ 反 省	小麦粉粘土の場面では、子どもだけでなく、お母さん方の喜ぶ顔も見られ、人気があったように思う。中には、作り方を聞かれていたお母さんもいらっしやった。作り方では、油を入れるということでのびがよく、子ども達にとっても遊びやすく楽しめたようだ。傘袋に水を入れたものは、転がしたり、手や顔で冷たい感触を感じたりしながら楽しんでいて、ビーズを入れておいた方は、つるしてあったということであまり子ども達の目には入らなかったようだった。今回の設定では、戸板とラダーの設定の仕方が、入り口と他のあそびの場とをしゃだんするような感じがした。また、ラダーはまだ難しいようなので、階段と戸板だけにしてみた方がいいのでは…という意見があった。				次 回 へ の 課 題	・ 動きの設定				

資料2：育児講座のプログラムと実施記録②

すくすくキッズ記録用紙						清水台子育て支援センター					
月 日	9 月 28 日 (水)				参 加	18+(1) 組		担 当	小林	記 録	中野
今 日 の あ そ び	今日のムーブメント					製 作		お集まり			
	・トランポリン ・巧技台（平均台とゲームBOX） ・ままごとコーナー ・感触あそび コンニャク 金時豆 ・園庭で遊ぶ（フーセンカーテン等） ・身体意識を育てる ・リズム感を養う ・動きの基本を育てる ・社会性を育てる ・手の操作性（つまむ、スプーンですくうなど）を育てる ・聴覚を刺激する ・時間・空間意識を育てる					ペープサートづくり （だれのはな？） 		うた “とんぼのねがね” “おつかいありさん” ふれあいあそび “パンパンパンやさん” 体操 “くるくるくる” おたのしみ “まあるいたまご”			
環 境 設 定											
親 子 の よ う す	トランポリンを中心に動きを楽しむ子どもの姿がみられた。ただとび方については自由にしている部分があるので少しずつ親への投げかけもしていくといいのかと思う。バランス的には個人差がみられる。ペープサートは前回話をしてあったので、来てすぐに「これ作ろう」と親のほうがかかっていく感じで、できあがりで遊べるのが子どももうれしく、大事にもっている子が多かった。このような提供の仕方はよかった。シールはりも小さい子から集中できていたように思う。感触あそびでは何気ないものでも、子どもが集中して遊ぶように親が「家でもできますね」「こんなものでも遊べるんですね」と感想が聞かれ、発見もあったようだ。					相 談 等 の 記 録		・親せきの子どもとのことで保育園に慣れず退園するが、出かけようとする、ひどい泣き方するので心配（2歳児）。何か障害があるのかどうか…。親せきは、やさしい子にしかみえないが、家ではひどいとのこと。 ↓ お子さんのようすが、細かくわからないので、適切なアドバイスはできないが、下の子もいるので、母親への気持ちのぶつけ方がでてるのかもしれない話をし、必要なら3歳児検診等、何かあれば専門機関に受診してもらう方法もあると伝えてある。			
評 価 ・ 反 省	製作は前回おたのしみで使ったペープサートを用意したので、前回からの継続となり目的をもって登園できるようで、よかったように思う。ただ1枚だけでなく2種類とも作りたい子もいて、もう少し用意をしていくべきだった。今日はスタッフが少なかったので、保護者へのかかわりがあまりとれなかった。園庭もうまく環境を提供できなかったのが反省である。もう少しスタッフ間で確認をしていきたい点も多い。お集まりでは十分に遊んだあとかなり集中してみたり、聞いたりしているようすなので、年齢的にあったものをもう少し用意してあげなければと思った。					次 回 へ の 課 題		巧技台の設定をもう少し挑戦ができるものにしたい。 10月となるので、園庭で運動などを充実させるとともに、秋の自然（どんぐり、柿）に触れる機会を作っていく。			